わたしの戦争体験

佐賀県小城郡小城町　　久保　時子

涼しい風に吹かれながら、白い雲と灰色のような雲が交った青空を眺めたり、庭のアロエ等を見て過去を振り返っています。ただぼんやりと過ごし、失敗だらけの私ですが、たまたま戦時に遭遇したことなどこうして書かれる機会に恵まれたことを感謝します。

私は今６７歳、４人の子供と５人の孫に囲まれ、幸せな余生を送っています。私は昭和２年７月旧満州（現在、中国東北地方）の大連市に生れました。弟１人妹２人も次々に生まれました。父は以前新聞記者だったそうですが、私の記憶にあるのはもう「双葉屋」という質屋の子供だったということです。子供の頃はただ楽しい思い出ばかり。万国博覧会やサーカスも次々に来て、それに大連は海水浴のメッカでもあったし、それはもうパラダイスの中の少女のようだったですよ。

昭和１６年大連弥生高女から佐賀県立小城高女に転入しました。小城高女２年の１２月８日太平洋戦争が始まりました。小城高女時代は、よく薙刀とか竹槍訓練を受けました。そして山の茶園に勤労奉仕に行きました。制服のスカートはいつ頃からかもんぺに変っていました。上服はセーラー服に赤スカーフでした。隣の中学校（今は合併して小城高校）との間には高い塀が立てられ、私達の知らぬ世界がそこにありました。中学生とはお話することも見ることもできないと言われ、そうかなとただ淡々と過ごしておりました。そんなある日、大連の弟から一通の手紙を受け取りました。それには「お姉さん、僕は乙飛（乙種飛行予科練習生）を受けようと思っているのですが」とありました。私はすぐさま「絶対に行かないで下さい」と返事を書きました。私は１５才、弟は１３才になったくらいだったでしょう。結局弟は行きませんでした。戦局も厳しく、食べたいお菓子もなくて、どこのお店屋さんもお菓子のビンはカラでした。４年生の時、小城地区で県下の中学生の戦闘訓練があり、小城高女４年生が救護訓練で参加しました。陸士（陸軍士官学校）海兵（海軍兵学校）甲飛（甲種飛行予科練習生）へと、次々中学生は走り去り、私の思ってたとおり人数は少なかったのです。友達も皆同じ思いだったでしょう。二昼夜にわたった訓練のあの日あの頃、心の曇りはあったけど、なぜか毎日がどんより曇っていたような気もします。

やがて卒業の日を迎え、南満州鉄道等満州（現在、中国東北地方）各地へ数人、日赤甲種看護婦３人、代用教員に少数が行ったほかは、全部挺身隊に行かねばなりませんでした。長崎県川棚等４ヶ所が行き先でした。私は大連に帰ることにしました。昭和１９年春です。大阪商船の「ぶらじる丸」に乗船しました。いつもは大連航路は２泊３日でしたが、１週間かかてやっと大連港に着きました。着いたとき、ほっとした気持でした。私は南満州鉄道本社審査統計事務所に入社し、素敵な南満州鉄道の女子社員服を着ました。その頃街は、南満州鉄道の制服を着た男女で溢れ、私たちは浮き浮きとエキゾッチクな大連の街を闊歩しました。

ある日、電車通勤の途中空襲警報がなり、電車はピタリと止まって、運転手さんはもう逃げて、おりませんでした。私達はすぐ近くの大連市役所の防空壕へと急ぎました。大連市役所の防空壕はチャチな壕とは違いました。外国映画の戦争映画に出てくるような、幅の広い、奥行きの深い徐々に地下に下がっていくものでした。父はその頃、私達の家にも防空壕を造らせました。私は大連市郊外甘井子という所にある満州化学工業人事課給与係にお仕事を変えておりました。満州化学工業の工場にはたくさんの中国人が働いていて、甘井子の街も綺麗な家が点在し美しい所でした。

昭和２０年春、私は日赤甲種看護婦に合格していました。学校を卒業してちょうど１年です。でも父の反対で、日赤に取り消し願いを出しました。その頃、現役兵の年令が２０才から１９才に下がっておりました。給与係から２人現役で行かれました。多くの陸看（陸軍看護婦）の方々も行かれたので、大連駅にも見送りに行きました。すごい人出で、あの広い駅前広場も送り出す若人の群れで埋め尽くされていました。戦局も不気味さを増し、人々も疲れと緊張の頃、南満州鉄道鉄道工場塗装工場で大火がありました。夜空に延々と炎が広がり、すごい大火で口惜しくてなりませんでした。弟は鉄道工場に勤めていましたので、すぐ支度をして出て行きました。

８月大連市に戒厳令が敷かれ、それから１週間程であの８月１５日がやって来たのです。もう黒い分厚いカーテンで、寸分も洩れないよう、窓を覆う必要もありません。夜空に走るサーチライトの光もありません。満州化学工業からバスで暗くなって帰るとき、中国人の民家にはあかあかと灯がともり、久しぶりの平和の灯を複雑な気持ちで眺めました。それから３日ほどしてソ連兵が駐留して来ました。でもこわかったのは中国人の暴動でした。私と上の妹は何回も二階の天井裏に隠れました。母や下の妹は地下の防空壕に隠れ、父は自警団で、色々と何か事件があったようでした。それから数ヶ月は、強盗が入り、日本の復員兵等の方々は捕えられました。でも悪い事ばかりしていません。カバンを取られたおばさんに取り返してくれた、頼もしい日本男性もいました。

ある日、数人のソ連兵を伴って日本の将校さんがやって来ました。１軒おいて隣の家のお兄さんが脱走して帰って来ていましたが、父が将校さんに「そんな人知りません」と言っている間に裏から行って知らせました。お兄さんは逃げましたが、その友達は捕まりました。現役兵だけ捕虜となって、使役をさせられていたそうです。その将校さんは「私はこうして探しに来たくはないのですよ、逃げてくれればいいのです」と言っておられました。

不穏な空気もいくらか和らぎ、旅順、金州等から大連に集まり、また大連の方も詰めて住まねばならなくなりました。私の家の半分に、２丁目の写眞館一家が来られました。ところで皆さんどんなにして生活しておられたのでしょう。単身義勇軍とか開拓団等で満州に渡られた方達は……と私、気になっていました。みんな自分のことが精一杯で、粗末な食べ物で我慢しなくてはなりません。売り食いするにも売るものもありません。

翌昭和２１年、満州奥地の方々はコロ島が集結地でそこから引揚げが始まりました。それが

すんでやっと大連引揚げです。一番緊急な生活を強いられている方々が早くて、比較的生活に余裕のある家等持っておられる方が遅かったのです。わが家は質屋時代収入が特別だったので、あまり不自由はしなかったようです。質流れもどんどん出ました。引揚げも一番ビリでした。

そんな頃、買い出しの中国人郭さんが「長い間お世話になり儲けさせて下さったから、お礼に私の家で中国料理を御馳走したい」と招待を受けました。わが家には質流れ（もちろん日本の着物も）を買ってまた自分の店で売る中国人がいつも十数人座っていました。父は社交家で中国人とも仲が良かったし、商売外の中国人にも優しかったのです。郭さんの所で、それはもう豪華なお料理を動けぬ程お腹いっぱい食べて楽しい一日を過ごしました。

それから数日して引揚げの集合場所と日時の通達がありました。母はふとんの中に日本紙幣を入れました。そして、めいめいの体に応じた大きさのリュックサックの中に身廻り品を詰めました。そこへお友達が来ましたが、日本の住所と名前はお互い書いて手渡し再会を約束しましたけど、残念ながらそれきりになってしまいました。ソ連の軍票と中国紙幣は通用しないといって没収でしたが、引揚船の中では日本円に交換できたのでした。小粋な船員さん達による慰安会で聞いた歌は「りんごの歌」、パアッパアッと辺りが明るくなって行く感じで、心弾ませて聞きました。

佐世保港外で１週間待ち、針尾島の収容所で約１週間ＤＤＴなど全身に頭から振られて蚤虱退治でした。朝暗いうちに起きた私達は、大きなリュックを背負い、小高い丘を越えて南風崎駅から引揚列車に乗りました。警察に追われた犯人が列車に逃げ込んだりしましたが、１時間程して久保田駅（佐賀から佐世保寄り２つ目）に着きました。親戚の人がリヤカーを引いて迎えに来ていました。それから１０日程して弟は多久の立山炭鉱の寮へ行き、私は佐賀の大和紡績佐賀工場の寮へと行くことになりました。大きなリュックを背負い、みんなに見送られて、約２㎞先の久保田駅目指して、嘉瀬川の土手をスタスタ歩いて行きました。昭和２２年２月の末になっておりました。